飛翔な日々…秋ですね！…

『にわかコーヒー飲みのぼやき』

……おいしいコーヒーが飲みたい。

なぜおいしいコーヒーが飲みたいのか。それは、下宿にあるコーヒーが不味いからだ。なぜ下宿のコーヒーが不味いのか。牛乳がないからだ。牛乳がないと、上田宅のコーヒーはとんでもなく不味い。冷たいものも温かいものも砂糖を入れたものも等しく不味い。決してブラックコーヒーが飲めないわけではない。昔は飲めた。ただ下宿のブラックコーヒーが不味くて飲めないのだ。下宿のコーヒーは、コーヒー牛乳ばりに薄めないと、飲めたものではないのだ。

ただ牛乳を買えばよい話なのだ。しかし、我が家には牛乳がない。なぜなら、牛乳は高い。一リットルあたり、約百五十円。低脂肪乳はなしとする。牛乳に百五十円払うのに抵抗を感じる。もうひとつ、賞味期限が過ぎてしまうのが怖い。賞味期限（及び消費期限）が過ぎても気にしない性格ではあるが、牛乳は話が違う。牛乳は腐る。時によっては期限内にも関わらず腐る。……他の食材も腐るが、牛乳は特別なのだ。理由は知らない。困ったものである。自炊あんまりしないミール勢の私がそんなものを買うと、冷蔵庫に入れっぱなしにして忘れてしまうのがオチである。まだ一度も牛乳を腐らせたことはないが、「あかん腐ってまう！飲まな！」と思って急いで牛乳を飲みほしたことはしばしばある。そうなるのが嫌なのだ。

そして今日も私は不味いコーヒーを飲む。いっそインスタントじゃなくてドリップとかプレスとかで淹れたい。そんなお金などどこにもなかった。

27生　上田　朋子

『感性の違い』

最近の出来事である。急に漫画が読みたくなって大手本屋の漫画売れ筋ランキングをネットで検索した。少しこだわって、あまり有名ではないが人気急上昇のものを買おうと思いレビューで評価を確認し、選考してある漫画を買うことに決めた。もちろんレビューでは、「笑いたければ買うべし！」「作者のギャグセン高すぎワロタ」などと書いてあり、満点に近い評価のものを選んだ。漫画に関しては知識が疎いので、どれがおもしろいのかを判断するにはレビューくらいしかなかったのだ。数日後、家に届いたので早速買った3巻分すべて読んだ。レビューであれほど褒められているのだから当然面白いのだろうと思って読み始めた。しかし実際、本当に人気急上昇なほど面白いかというと他の漫画とさほど変わらないのでは…というほどだった。はっきり言うと面白くなかったのである。そもそも自分の笑いの沸点が高すぎたり、笑いの方向性が間違えているのかもしれないとも思った。

ここで私は「感性に違いがあるのだから、あまり人の評価はあてにしてはならないな」と感じた。この考え方はマイナスなものではなく、むしろ他人と異なるこの感性を大事にしていこうと思えるポジティブなものであった。そうすることによって変な流行などに扇動されることもなくなるのではないか。失敗から学ぶことは多いものだ。私はレビューに「面白くない」と書くことにした。

27生　松井　健太

『一攫千金』

夏休みに旅行で某ネズミの国に行くことになった。わーい。

遊園地といえば、待ち時間。９０分とか１２０分とか。あれ並ぶのちょっとテンション下がりますよね。

遊園地側も退屈をなるべく感じさせないように、並んでいる途中にいろいろ見るものなど作って退屈させないように気を配っている。しかしそれを見たときに「ああ、かわいいな」とか「よくできているな」って思って終わり。退屈は全く解消されない。早く進んでくれ～。次第にいらいらしてくる。折角の旅行も台無しです。

そこで！すごくいい考えがあるんです。端まで行って折り返して、また端まで行ったら折り返して、ってなっている並ぶところの地面を、すごろくのマスみたいにするんです。で、そのマスの中に「初恋の思い出」とか「犬派か猫派か」みたいなトークテーマを書く。

これ絶対盛り上がる。あっという間に時間流れる。一緒に行った人との絆深まる。すごい！素敵！

遊園地の人、このアイデア2億円くらいで買ってくれないかな。

みなさんが楽しい夏休みを過ごせますように！

27生　古川　幸美

『わたしのメガネ半生』

私が初めてメガネをかけたのは、中学2年生の時であった。当初は「授業の時だけかける」というスタンスでメガネかけていた。しかしそれは長くは続かなかった。以下、私の半生とメガネとの関わりについて述べる。

中学3年生の時には「常にかける」スタンスへ移行しなければならないほど、視力が低下していた。この時から、私はメガネをかけて生活することを決意したのである。高校生になっても、私のスタンスは変わらなかった。しかしここで「コンタクト」という概念に遭遇する。コンタクトとは、眼球に直接レンズをはめ込むという非常に恐ろしい行為だ。高校になると多くの人がコンタクトをつけて生活していた。みんなが眼球にレンズをはめ込んでいると考えると、とても授業に集中できたものではなかった。

今までメガネだった人がコンタクトへ変わるという事態も起こった。私からすると、異常事態である。どうしてそんな恐ろしいことができるのか。話を聞く限り、眼

科に通ってコンタクトの練習をするらしいのだが、それすらも非常に恐ろしく感じた。

長いスパンで考えた時、コスト的にメガネの方が安く済む。メガネなら眠たいときに着脱が非常に楽であるが、コンタクトの場合、つけたまま寝ると失明するというリスクを背負うことになる。常に失明の恐怖に怯えながら生活したくない。どうしても私にはメガネの方が良く見えてしまうのであった。

長々と語ってきたが、私が言いたいことは「これからもメガネと共に生きていきたい」ということである。メガネをかけてきて早6年目。私というものを語る上でメガネは切っても切り離せない存在なのだ。これからは「共に生きる」というスタンスで生きていきたい。メガネ男子の益々の発展を祈って、飛翔な日々とする。

27生　堀田　悠輔

『一期一会』

新生活が始まり、半年近くが経つ。キラキラと輝いているイメージだったが、レポートに追われ、締め切りギリギリにしか提出できない自分への嫌悪感に苛まれる日々が続く。

九州の田舎で育ち、都会への憧れを抱きながらも、結局は周りが田んぼという中で暮らしている。やっぱり、自然が落ち着くらしい。（名前も自然だし…）

そんな自然の中にある、広島大学のオープンキャンパスには高校2年で来た。

広い広いキャンパスに魅了された。「総合科学部」の見学にも行った。大きな講義室で教授の話を聞いた。聞いているときにふと思った。

「また、ここに来る気がする」

そう思って2年経って、またあの講義室にいる自分。直感というか運命なのかなと思う。そして、この四月から出会ったこの出会いも全部運命なのかなと。

茶道が趣味の私はやはりこの言葉が好きなわけで。「一期一会」。お茶会の席で一緒になる方は、一生に一回しかない出会いだから、大切に接する・・・。

運命を信じて生きるなんて、なんだか自分に限界を決めて生きているような、そんな気がすることもある。だが、何もかも説明がついてしまう世の中で、言葉じゃ説明できないものがあると思えるとなんだか幸せになることもある。（おばけはこわいけど。）

夢にみたキャンパスライフ。うまくいかないこともあるけれど、毎日笑えている私はきっと幸せだ。この地で新たな出会いを大切にしていきたい。

27生　森　みずき

『見返り』

浸水し、画面が狂った私の携帯。そいつが奇跡的に回復してからは、撫でながらポケットにしまい、慎重に充電器へつなぐという日々を過ごした。本日は、その携帯が数日もせずに水没し、召されたである。そんな私の日々を書くのは億劫なので、このたびは「優しさ」について考えることにした。

優しさは、時に人を傷つける。例えば、異性からのやさしさに期待し玉砕した人は数知れない。優しさは、時に「人」を傷つける。ここでいう「人」は、優しくされた側を指すことが多い。だが、実際はどうだろうか。

私が思うに、ここで傷ついているのは、優しくされて玉砕した側だけではない。例えば、気持ちだけでも、と今日も誰かにチョコを差し出し元気づけようとしている彼だって、傷ついているのだ。他人の気持ちを人一倍理解してしまうがために、自分まで悲しくなってしまい、どうも手を差し伸べてしまう。今この人を助けられるのは私だけだ、と、目に見えない任務にいつまでも付きまとわれてしまう。これだと損ばかりである。

そんな重苦しい正義感と共に生きている人間は、どこにだっている。無論、この構内でも見かける。しかし、とある人の言葉がきっかけでね、と語ったあの人は、以前とは違い、顔を上げて歩いていた。今日も足取りよく講義室へ向かっているだろう。

私は思う。少しでも多くの優しい人が、上を向いて歩いていけたらな、と。そして、そう思える優しい私を見込んで、新しい携帯を寄贈してくださる誰かがあらわれたらな、と。そんな見返りを期待するくらいが、実はちょうど良いのかもしれない。

26生　竹内　音寧

『期末試験戦記』

二十三日、天気晴朗なれども波高し。皇国の興廃この一戦にあり。昨晩は徹夜して初戦に臨む。前半リードして折り返すも後半には(脳内の)雲行きが怪しくなる。控えの切札ロイズ社製アーモンドチョコレートを投入するも戦果は芳しくない。二十四日、お好み焼きを食べに行くついでにエヌ氏から教科書を譲り受ける。これでまた戦える。そば肉玉に餅＋イカ天のトッピングこそ至高。二十五日、終日ドストエフスキイ氏と対話。文学的余韻に浸りつつ、昼飯に実家からの配給品であるウナギを温めていたところで午前中補講があったことを思い出す。ホカホカの蒲焼を前に呆然と立ち尽くすばかり。二十六日、ベイスが阪神との三連戦を負け越す。情けない。二十七日、うっ…頭が…二十八日、昨日からレジュメの七番が見つからない。夜を徹した捜索にも関わらず、結局そのままの出撃強行を余儀なくされる。そして狙い澄ましたかのように鮮やかな強襲ヒット。必死に授業の記憶を辿りつつ、体に当てて落としてスローイング。何とか書き切る。二十九日、謎の大掃除、謎の自作料理、謎の野球観戦等々。三十日、今朝も徹夜で出撃。ちなみに試験前にさるルートか

ら「モンスターエナジー」を一箱入手することに成功している。カフェイン含有量は珈琲に匹敵。一本入れると動悸がして口臭がきつくなる等の作用がある。キッズには非推奨である。三十一日、あ、ありのまま今起こったことを話すぜ！「おれは補講に出ていたと思ったらいつのまにか試験が始まっていた」何を言ってるのか分からねーと思うがおれも何をされたか分からなかった…頭がどうにかなりそうだった…(略)一日、ドスト氏との格闘を終え、実質的な戦闘終了を一方的に宣告。二日、録りためた「吉田類の酒場放浪記」を見る。未視聴の阿呆学生諸君は必見のこと。三日、平穏は脆くも崩れ去る。

もう何度目かの「さっさとやれば良かった」七日、今季最終戦に登板。悪くはない出来で締めくくったが、総括すると懸案事項多数。特に記憶力の弱体化を自覚してショックを受けた。夏休みは傷心旅行と決め込むか。なお徹夜は思考力判断力を低下せしめるばかりか「今日も徹夜すれば何とかなる」などという安易な油断を生じさせ、挙句勉強には集中できない事態になりかねない。朝焼けを見たいとか特段の事情がなければ、本稿では決して徹夜行為を奨励する意図はないので注意されたし。

26生　柴山　真一

『20歳になる自分へ』

期末テストやら、サークルやらでバタバタしているうちにあっという間に8月も中頃に差し掛かり、夏の計画なんてすっかり考える間もないまま、いわゆる夏休みというものを迎えました。たまたま見たSNSサイトでは、帰省した友人たちが集まって飲み会をしていて、みんな成人してることに違和感を覚える一方で自分自身ももう直ぐそうなることにより強い違和感を覚える。これまであまりしっかり考えることのなかった「自分自身」について考える機会であると悟りました。次の一年は今過ごしている1年よりも責任のあるものになることをしっかり肝に銘じ、その一方で、今まで以上にやりたいことをやっていくものにしていきたい。それはあくまで「やりたい放題」ではないようにしていかなければ。まだまだ稚拙な自身ではあるけれど、年齢的に「大人の仲間入り」を果たす自分自身としっかり向かい合っていきたいと思いました。

26生　宮里　洋志